

栗林公園の歴史

1. 栗林公園の沿革

栗林公園の起こりは、16世紀後半、元龜天正の頃、当地の豪族佐藤氏によって、西南地区（小普陀付近）に築庭されたのに始まるといわれ、寛永年間（1630年代）に、当時の讃岐国領主・生駒高俊（たかとし）公によって南湖一帯が造園され、現在の公園の原型が形作られました。

その後、寛永19年（1642年）生駒氏の転封に伴い入封した初代高松藩主・松平頼重（よりしげ）公（水戸光圀公の兄君）に引き継がれ、さらに100年以上経た延享2年（1745年）、5代頼恭（よりたか）公の時に、園内六十景の命名をもって完成しました。以来歴代藩主が修築を重ね、明治維新に至るまでの228年間、松平家11代の下屋敷として使用されました。

明治4年（1871年）高松藩が廃せられ、新政府の所有となり、明治6年1月公布された「公園に関する太政官布告」に基づいて明治8年（1875年）3月16日に県立公園として一般に公開されるようになり、さらに昭和28年3月には、文化財保護法による「特別名勝」に指定され、今日に至っています。

2. 歴史を巡る

■ 築庭の起源

かつてここには、香東川の東の流れ（西の流れは現在も残るもの）がありました。東の流れは、現在の高松中心部（高松城や市街地）へ流れ、頻繁に氾濫を起していたため、この流れをせき止める治水工事を行いました。

この工事を行ったのが、生駒高俊が藩主を務めていた寛永8年（1631）年頃に、仕えていた西嶋八兵衛です。

その結果としてできた大きな水たまりや伏流水などを利用して、栗林公園の庭づくりは始められたとされています。



西嶋八兵衛



■ 栗林荘から栗林公園に至るまで

栗林公園は、室町時代に生駒家に仕えた佐藤志摩介道益が隠居して当地の西南地区（小普陀付近）に築庭したのが発祥とされています。

それが後に讃岐高松藩主となった松平家の別邸、すなわち栗林荘として拡大整備されたのです。

そして明治維新を経て、大名庭園・栗林荘が松平家の手を離れた後、明治8（1875）年、県立公園として公開されたことから現在の“栗林公園”と変わりました。



栗林公園
（旧栗林荘）

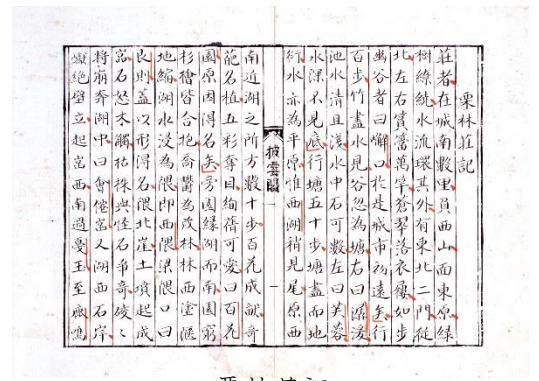
高松城
（旧玉藻城）

■ 松平家歴代による栗林荘の整備

栗林荘が大名庭園として本格的に整備されたのは、高松松平家の時代になってからです。栗林荘の築庭は、豊臣秀吉の時代から讃岐国を治めた生駒氏によるともいわれますが、その頃の様子をはっきりと示す記録は、明確ではありません。

大規模の造園は、高松松平家の初代頼重（1622年～1695年）の時代にはじまります。生駒氏が御家騒動によって改易され、その後に高松城に入った初代頼重は、水戸徳川家の出身で、頼重に讃岐国高松12万石が与えられる際、将軍から西国・四国の目付を命じられたという記録が残っており、将軍家の親族大名として西日本の守りを託された存在でした。

主たる政務を次代の頼常（1652年～1704年）に譲った頼重は、自らの居所として栗林の地を選び、庭園として整備を行います。二代頼常の時代には、栗林荘の築庭が飢饉対策とされるなど庭園の範囲が広げられました。三代頼豊（1680年～1735年）は参勤交代で在国する際には、高松城ではなく栗林荘を居所とし、庭内の施設を充実させています。五代頼恭（1711年～1771年）も作庭に力を入れ、改修を施し、さらに1745年、藩の儒学者に命じて庭内の名勝に中国古典にちなんだ名前を付けさせ、これをもって栗林荘の完成としています。



栗林荘記

コラム：茶の湯とのつながり

千利休から始まる千家の茶の湯の流れは、曾孫の代になり三流派（三千家）に分かれます。

松平家初代藩主頼重公は、高松藩初代茶道頭として、千利休の曾孫にあたる初代千宗守（一翁）を京都から招聘。一翁宗匠はここで3年近く茶道の指南役を担い、その後その職を辞して京都の武者小路で開祖したのが、三千家のひとつ武者小路千家です。別名を官休庵というのは、松平家の茶道頭（官職）を辞した後に開いたことに由来します。武者小路千家では、一翁宗匠以降も歴代家元は讃岐高松藩の茶道指南をつとめました。また、茶の湯に関係の深いお庭焼（理平焼）もこの場から生まれました。



旧日暮亭